マノイレスコの生産力概念と其想源

手塚壽郎

一

一九二九年に出版されたマノイレスコの著作 La théorie du Protectionnisme et de l'échange international. Paris. は逸早く英語、伊語に飜譯せられ、近くはまた獨逸語に譯出されて、大なる波紋を貿易政策理論の研究者の間に作りつゝある。云ふまでもなく此書の中心をなす概念は一生産部門の生産力 Productivité である。此生産力なる概念は大體に於て Rentalilité に對立せしめられた Productivité の概念に近いものを目標としてゐるのではあるが、これとは異つて、それは國際貿易の存在を根本的なる前提としてゐるがために、これとは稍異つたものとなつてゐる。これ、換言すればランタビリテに對立せしめられたプロヂクチヴィテが正確に何を意味するかは、實際には、未だに大なる問題であつて、多くの人々が、否それどころか專門の經濟學者さへも考へてゐるやうに簡單なものではない。一國全體から見て望ましかるべき物財を作り出すこと、又は一國全體

から見て望ましかるべき利用を作り出すことが、生産力と考へられる場合が多いのではあるが、物財にも種々なるヴァライティズがあり、從つて此らを比較して何れかの採否を決定すべき標準が無ければならないし、望ましき利用にしても如何にして之を測定するか、各個人に對する利用と、一國にとつて望ましき利用との關係如何も定められねばならない。然しピグーの研究あり、ローリアの研究がある今にして尙、此らの問題とせられた事項が決定的な解決を與へられてゐるやうでもない。

Rentalité に對立せしめられた Productivité は、かやうにして解決に著しく困難な問題を含んでゐるのではあるが、それが概ね物財の量を作る力であるか、利用を作る力であるかは、ほゞ想像することが出來る。それに比較すれば、國際貿易政策に於てマノイレスコがその政策論の中心概念として掲ぐる所の生産力は可成りの相異があらう。國際貿易政策論にあつては、貿易の可能が假定せられてゐる。國際貨幣を提供しても、外國が當方の國に物財を賣渡すことも肯じない場合が現實にあるか否かは別問題であつて、貿易政策論に於て貿易政策が問題とせらるゝ限りに於ては、これが必ずや肯ぜられると云ふことが前提とせられてゐる。現實について見ても、當方の國の物財が提供せられて、外國が貨幣を提供することを肯じない場合が屢であるにしても、それと反對なる場合は極めて稀である。これは、多くの場合國際貨幣を提供しさへすれば、外國は物財を與へて來れるからである。

かくの如くであるから、貿易政策論にあつては、國内の經濟政策論に於てと異り、物財なり利用なりが生産

力として政策の目標とせられる必要はないわけであり、貨幣額が生産力として目標とせられてよいのである。貿易によつて貨幣額が如何に多く得られても、一國の厚生は増加せぬのであるから、政策の目標にはならぬとの批難は、右に云ふ理由によつて排斥せられる。また如何に多く貨幣を集め得ても、之を以て他國の物財を購ひ得ない場合があらうと云ふ批難もあらう。たしかに封鎖せられた戰爭下の國や、他の總てを相手として戰爭をなしてゐる國の如きにとつては、如何に多く貨幣が集積せられても何の役にも立たない。それは物財ともならなければ、利用ともならない。然し封鎖下にあるが如き、又は交通し得る他の總ての國を相手として戰爭をなしてゐるが如き場合には、貿易は全く行はれ得ないのであつて、貿易政策其ものが存在の意義を失ふのである。貿易政策は貿易の存在を豫想して初めて意義がある。

貿易の存在を豫想してゐるがために、マノイレスコが貿易政策論の中心概念としたところの生産力は、物財を生産する力でもなければ、利用を作り出す力でもなくなつてゐる。それは貨幣金額を作る力となつてゐる。貨幣金額を作る力と云つたとしても、決してそれは、Rentabilité を指してゐるのではない。また事實に於て、如何なる學說上の立場に立つ人と雖も Rentabilité そのものを以て直ちに一國の厚生であると考へないであらう。極端な個人主義と功利主義とを採る人と雖も尙且つ Rentabilité を以て直ちに一國全體の厚生であり、政策の目標であるとなすには躊躇するであらう。マノイレスコが貨幣金額を作り出す力を生産力と名附けたと云つても、其貨幣金額は次の如きものでしかない。

それは生産物の valeur brute（販賣價額）のうちから、生産に先行して存在したる價額 valeur préexistante à l'opération industrielle（工業生産物の場合）を控除せる殘額である。此生産に先行して存在したる價額とは、

一、原　料。工場に到着するまでの運賃を含めた購買價格を以て計算せらるべき原料の價額。

二、燃　料。

三、消耗さるゝ機具 outils consommés par l'industrie. 或種の工業にあつては、機具の消耗は著しい額に達する。然し前二者が統計を以て明らかにせられてゐるにしても、此れは看過せられてゐる場合が多い。

四、照明、暖房、水道等 matériaux étrangers divers 及び工場外の人々のなす用役例へば小運搬荷物積卸等の費用。

五、工場の維持及び減價償却。

六、設備の價値減少の償却。

此殘額は純生産額 production nette と稱せられる。此内容をなすものは、勞働者の賃銀及び職員の給料、資本の諸利潤、債權者に支拂ふ利子、保險料、租稅である。夫れ故に、右に列擧した諸項目を控除する計算をなすことなしに、簡單に、純生産額の内容をなす此らの項目を加算することによつてそれを計算し得るが如くである。然し此加算による方法は必ずしも正確を期し得ない。諸會社等の示す利潤は、たとへ脫稅等の行爲が無い場合にも、眞實の利潤と同じくないのが常である。減價償却費を資本設備の眞の減價に從つて定むること

なく、以て利潤として示さるべき額を人爲的に變化することが出來る。例へば短い期間に減價償却を行ひ、數年の後に資本設備の價値を極めて小額に計算する企業が尠くない。かゝる企業にあつては、利潤は人爲的に過小に見積られてゐる。而して償却を了へた後には、利潤は人爲的に過大に見積られてゐる。利潤について、尙一つ之を不正確ならしむる事情がある。それは企業が支拂へる利子及び收入せる利子である。何となれば支拂へる利子及び收入せる利子は、吾々が目的とする年の以前の企業の進展の表現であるからである。たゞ長期に亘つての計算例へば二十年間の純生產力の計算をなすが如き場合には、右の加算によつても稍正確な數字を得ることが出來る。減價償却は資本の減價の全額に一致し得るからである。

農業企業の場合にも、純生產物の計算はほゞ同樣である。販賣總金額から控除せらるべきものとしては、一、種子を含む原料は常に存在すべく、二、燃料は動力を使用する場合に存在すべく、三、機具機械の消耗は著しく重要なものとして存在すべく、四、農業用設備の維持費用、五、減價償却は農耕用設備について存在するのであらう。[1]

既に云つたやうに、貿易政策の理論は貿易が可能であることを前提してゐるのであり、從つて貿易によつて一國が受くる gains は貨幣額を以て示され得る。而して販賣總金額のうちから、一國の gains とならない金額が控除されてマノイレスコの純生產額が示される。其純生產額は利潤と同一ではない。利潤はたゞ企業者の私經濟的立場に於ての利得であつて、一國の gains の一部であつて全部ではない。一企業から支拂はれる賃銀に

1) Manoilesco, La théorie du protectionnisme et de l'échange international, 1929, pp. 25—34.

せよ地代にせよ、其企業者の私經濟的立場からは利得ではないが、一國から見れば gains である。勞働者が勞働をなして賃銀を得るためには、生活しなければならず、生活するためには費用を必要とするが、生活は自己目的であつて、其生活が豐富になつて行くと云ふことは一國の gains であつて、費用ではない。地代また同樣である。利潤もまた同じやうな性質をもつてゐると云つてよい。極めて具體的に云へば、貿易によつて豐富なる賃銀地代を得て、それを以て生活資料を購ひ得れば(或ひは總ての物財)、それだけ一國全體の厚生は增加するわけである。ところで賃銀も職員の報酬も地代も利潤も何れも一國の gains なのであるから、利潤のみが如何に大であるからと云つて、一國の gains が大であるとは云ひ得ない。賃銀や地代や租稅等が小であるならば、利潤を加へた此らの諸金額の合計は、利潤のみが大なる場合に却つて小となるかも知れない。反對に云へば、著しく大なる一國の gains を齎らす企業であるにも拘らず、利潤は著しく小であるか又は負數である場合があり得る。利潤の小であるか負數であると云ふことは、自國の其企業が他國のそれに技術上劣つてゐることを意味し、自國內で自然のまゝでは存立し得ない事實を意味してゐる。[2)]

かやうに明らかにされて來た純生產額は云はゞ純生產の絕對量であるに過ぎない、相對量ではない。或具體的な一々の企業が作り出す所の純生產の量に過ぎない。だからそれらの企業が用ゐる資本や勞働の量とは無關係に純生產額の絕對量だけが視野のうちに置かれてゐる。かくの如き絕對量が如何に正確になされ得ても、純生產力の指標としては何らの價値もない。そこで企業の生產力を評價するがために、純生產額を割當つべきエ

2) Manoilesco, op. cit., pp. 35—6.

レメントを定めねばならない。マノイレスコによれば企業の生産的力を決定する(limiter)ものに二つがあり、勞働と資本とがそれらであると云ふ。そして如何なる生産活動にも共通なるエレメンツは此らの二つであるから、純生産力を定むるには、各企業の純生産額を割當つべきエレメンツとして此ら資本と勞働とのみを考ふれば充分であると云ふのである。

マノイレスコ自身の言葉を以て此結論を表現して見る。「一方では純生産額と勞働者との比例、他方では純生産額と用ゐられた資本との比例を生産力の指標として役立たしむれば、各種の經濟活動の生産力を測定すべき確かにして論理的なる二つの手段が得られる。此ら二手段のうち、最も重要なそれは、純生産額と雇傭せらるゝ人との比例である。まことに、結局のところ、經濟學の關する目的は總ての社會科學のそれと同じく人である。總ての經濟活動の目的は人である。人は、生産物の唯一の消費者であるから、生産に對するまた消費に對する測定の單位である。(C'est l'homme qui constitue en même temps—étant le seul consommateur des biens qu'il produit—l'unité de mesure pour la production et pour la consommation.) 生産に從事する人一人について の生産力が大であれば、住民一人についての大なる消費の可能性があるわけである。……故にそれは社會の繁榮の眞の且つ具體的な徵象 (signe réel et le plus concret de la prospérité d'une société humaine) である。[3]

此叙述に續いて、マノイレスコは右の如き二つの指標を數式となし、また綜合指標を作つてゐる。Pを一産業の純生産額とし、Tを此産業に雇傭さるゝ人とすれば、此産業に於ける生産者一人の平均生産力は $\frac{P}{T}$ によ

3) Manoilesco, op. cit., pp. 38—9.

つて表はされる。同様に此産業の投下資本をCとすれば、$\frac{P}{C}$は資本の平均生産力を示す。此ら二つの生産力を綜合して示すものは $q=\sqrt{\frac{P}{T}\times\frac{P}{C}}=\frac{P}{\sqrt{TC}}$ である。これをマノイレスコは "Coefficient d'efficacité ou de qualité d'une industrie" と名付ける。

マノイレスコは一九二九年に主著を公にしたる後、一九三一年に Une nouvelle conception du protectionnisme industriel を公にし、同じ年に Revue économique internationale に Le nouvel équilibre économique européen を公にしてゐる。前者では資本の生産力には全く言及することなしに、"La valeur de la production nette moyenne realisée par un producteur c'est-á-dire un agent de production dans le cours d'une année"[4] とのみ云つてゐる。後者では "La productivité, c'est l'intensité que l'homme et le capital développent á produire des valeurs d'échange et de la capacité d'achat."[5] と云つたかと思ふと、數行の後には、"L'intensité de produire les choses avec les mêmes ouvriers"[5] を生産力としてゐる。Théorie du protectionnisme では生産力の概念が詳細に展開されてゐるのであるが、そこでは、北米合衆國に於ける農業と工業について資本の生産力が比較されてゐる。[6] けれどもそのほかには資本の生産力の概念は少しも展開せられてゐない。

このやうにして生産力の概念さへ明確になれば、貿易政策の經濟的目標は極めて明瞭になつて來る。生産力の大なる産業を自國内に保護し興隆せしめ、其らの生産物を輸出し、生産力の小なる産業を外國のなすがまゝに委ねて此らの生産物を輸入する、これらこそが貿易政策の經濟的目標である。

4) Manoilesco, Une nouvelle conception, p, 35.
5) Manoilesco, Le nouvel équilibre écononique européen, extrait, p. 8.
6) Manoilesco, La théorie du protectionnisme, p. 67.

二

先にも云つたやうに、マノイレスコの理論の中核は生産力なる概念にあるが、此生産力は資本又は勞働について計算せられながら、事實彼は勞働についての生産力しか重要視してゐない。而して此らの理由は資本と勞働とが總ての生産に共通な要素であり、就中勞働が共通にして最も重要なるものであると云ふにある。

だがマノイレスコは總ての生産に共通ならざる要素の存在を認め、且つ純生産額が此らの共通ならざる要素に充分に依存するものなることをも認めてゐる。「産業部門の農業たると工業たるとを問はず、夫々の生産力を比較するには、純生産額をば、之を得るために必要とした勞働及資本の量に割當てゝ見れば充分である。純生産額を限定するところの他の總ての要素は、生産部門の異るによつて異るものである。例へば農業に於てはそれらは耕地の廣さであり、礦山業に於ては鑛脈の量であり、工業に於ては種々なる原料（農又は鑛産物）である。勞働と投下資本のほかには、生産の總ての部門に共通な他の要素は存在しない。」[1] このやうに云つてゐる彼は、生産力を各産業について測定し、此ら各産業の生産力の云はゞ階梯を作らうとする場合には、「他の要素」の影響を無視すべきではない。Oulès に從つて此例示をなさう。こゝに、同數の勞働者、同一額の資本を用ひてはゐるが、用ゐてゐる自然要素が異る所の二企業があるとする。即ち一方の企業では、土地が肥沃であるか又は鑛脈が豐かであると假定し、他方の企業ではそれらが貧弱であると假定する。前者では十萬圓の資本

1) Manoilesco, La théorie du protectionnisme, pp. 37—8.

と十人の勞働者によつて、二十萬圓の純生産額を作り、後者では十萬圓の純生産額しか作り出さないとする。今もし此ら二企業に共通ならざる要素を無視し、土地の肥瘠、鑛脈の貧富を無視すれば、そして純生産額を資本と勞働にのみ歸せしむれば、純生産額は前者に於て後者の二倍となるであらう。勿論此ら二者の平均純生産額を考ふることも不可能ではないが、土地も或生産には不可缺のものだとすれば、土地の生産力を考へないのは不合理である。況んや純生産額を資本にも關せしむることなしに、ひとり勞働にのみ關せしむるは不合理も甚だしいと云はねばならない。[2]

更に考究を進めて見ると、凡そ比較は同樣の基礎を有するもの〻間に行はれるに止る。だから $\frac{P}{C}$ にしても $\frac{P}{T}$ にしても、各産業部門の間に於て比較が可能であるがためには、企業の構造、技術的組織等が同一であるのは勿論、金融操作に至るまで同一でなければならぬ。Oulès は、國際間に於て生産力の比較がマノイレスコの場合に必要であるかの如くに考へ、夫々の國の生産の生産力は例へば勞働時間の長短、勞働の組織等によつて異ることを述べてゐるが、[3] マノイレスコを批判するためには此論證は不必要であらう。だが國内に於ける生産力の比較にさへ、企業の構造、技術的組織等の同一なることが必要なのである。同じく從事員と云ふも、熟練工もあれば、不熟練工もあり、技師もある。而してそれらの數は各企業に於て同一であるとは限らないのであるから、各企業の生産力が技師に負ふこと多きか、熟練工に負ふ所多きかゞ明らかではない。然らば單に一勞働單位の生産力幾何と云ふも無意義とならざるを得ないであらう。

2) Oulès, Le problème du commerce international, p. 321.
3) Oulès, op. cit., p. 324.

進んで考ふるに、$\frac{P}{T}$ 又は $\frac{P}{C}$ が、一單位の勞働又は一單位の資本によつて一産業部門に於て生ぜしめらるゝ一國の純生産額なりとし、此産業部門の有益なる程度を計らんとすることは、總ての産業部門に於て資本量と勞働量との割合が同一であることを豫想してゐる。然らざれば勞働の點から見て生産力が大であつても、資本の點から見て生産力が大でないと云ふことがあり得べく、かゝる場合に勞働の生産力を重視すべきか將たまた資本の生産力を重視すべきかの問題が生じて來るであらう。而して現實を見るに、資本量と勞働量との割合はあらゆる産業に於て異つてゐるのであつて、總ての産業に共通な割合はあり得べからざることである。

マノイレスコ自身此事實を認めたればこそ、$q=\frac{P}{\sqrt{TC}}$ なる生産力測定の方式を提示してゐるのであるが、此提示と同時に $\frac{P}{T}$、$\frac{P}{C}$ なる方式は殆んど全く現實性を失ふに至つたと云はねばならない。從つて此ら數個の方式に對する我々の批判も結局 $q=\frac{P}{\sqrt{TC}}$ に集中せられねばならぬことゝなるのである。

資本量と勞働量との比が全ての生産部門に於て同一でないとしたら、且つマノイレスコの $q=\frac{P}{\sqrt{TC}}$ なる方式が可能であるとしたら、マノイレスコは、或一定單位の勞働と資本とを、生産力を實現する力を有する同一の單位と見てゐた、と解釋されねばなるまい。$\frac{P}{T}$ と $\frac{P}{C}$ とを綜合することはTとCとが同一性質の單位たるときにのみ可能である。勞働と云ふ生産要素の生産力と資本と云ふ生産要素の生産力とを綜合するも、當該産業の生産力は得られない。二つの異れる性質の生産力が無意味に綜合されてゐると云ふに過ぎない。

勿論 Quiès が云ふやうに、勞働量と資本量との割合があらゆる産業部門に於て反比例關係を以て增減するも

のならば、資本量と勞働量との割合があらゆる産業部門に於て一致してゐると云ふ意味に同じくならう。例へば資本量を二倍にすれば、勞働は二分の一に減ずると云ふ事情があらゆる産業に存在する場合の如きである。今二萬弗の年純生産額を出す産業部門があり、十人の勞働者と千弗の資本を必要としたとすれば、

$$q=\frac{20000}{\sqrt{10\times1000}}=200$$

となり、且つ資本量を二倍すれば、勞働者は之に反比例して五人となるものとすれば、

$$q=\frac{20000}{\sqrt{5\times2000}}=200$$

となり、結局一指標を以て生産力を計算したと同一の結果を生ずるわけである。[4] 然し實際に於ては資本量と勞働量とが反比例關係を以て増減するが如きことはあり得ないのであるから、$\frac{P}{T}$ と $\frac{P}{C}$ との綜合は全く無意味なる係數に過ぎぬと云はねばならない。

マノイレスコ自身もこのことに氣付いてゐたと思はれる。けだし、"Cette formule $\frac{P}{TC}$ contient tout de même quelque chose d'arbitraire, par le fait dans le module $\sqrt{TC}$ l'importance accordée au capital est tout a fait égale á l'importance donnée aux travailleurs"[5] と云つてゐるからである。また先に云つたやうに、マノイレスコが此綜合生産力の方式を一度も應用してゐない事實は、間接に私共の批判の正しいことを證明してくれる。彼は生産力係數の統計的研究をなしてゐるけれ共、それらの係數は殆んど總べて $\frac{P}{T}$ であつて、$\frac{P}{C}$ さへもたゞ一度計算されてゐるに過ぎず、綜合生産力係數は一度も計算されてゐないのである。

4) Oulès, op. cit., pp. 328—9.
5) Oulès, op. cit., p. 329.

レンタビリティに對立せしめられたプロダクチビティを明らかにする場合に、純生産額が貨幣額を以て表はされ得るか否か、もし物量を以て表はされるとしたら、財に種々なる物があるのを如何にして共通なるものに還元すべきか、更にまた原本的な生産を土地と勞働としたとしても、此ら二者を如何にして同一の單位にて測定し得る綜合的なものになし得るかは、Otto Effertz に明瞭に現はれ、Landry に現はれ、ピグーに現はれ、ローリアに現はれた重大な問題である。而して未だに滿足な解決を見てゐない。名指された此らの學者のうちマノイレスコの綜合生産力と同樣のことを問題としたのは Otto Effertz である。彼は生産力係數を $\frac{w}{a+b}$ で、純生産額を $w-(a+b)$ で示してゐる。（wは效用量、bは土地の量、aは勞働の量である。[6]）ランドリーが批評したやうに、またランドリーに俟つまでもなく誰人も氣付くやうに、aとbと云ふが如き hétérogenes な二つのものを測定すべき共通なものはないのである。 ".....Cette détermination de la productivité suppose qu'on s'est entendu au préalable pour donner un commun dénominateur aux grandeurs w, a et b. C'est qu'en effet il n'y a pas de commune mesure pour des choses si hétérogenes : il est impossible de réduire le coût de tous les biens au coût d'une certaine espèce de biens, le seigle ou l'argent : l'un établira un certain rapport entre une utilité donnée w et une somme de travail a, entre cette somme et une quantité de sol b, un autre établira des rapports différents : c'est ici affaire de sentiment et d'appréciation personnelle."[7]

かゝる生産力計算の不正確なる概念を含むとは雖も、もし生産力を生産者についてのみの生産力となすなら

6) O. Effertz, Arbeit und Boden, vol. I, p. 117 ; Les Antagonismes économiques, pp. 81 et 93.

7) Landry, L'utilité sociale de la propriété individuelle, pp. 462—3.

ば、――これをなすには生産力を比較さるゝ企業の資本額を同様になさねばなるまい――生産力の計算は稍正確になされ得るであらう。然し此場合には、總て生産者は一様に同様の存在と見做さるゝのである。プルードンは最も大膽に生産者の勞働を總て平等と見たのであつたが、マノイレスコもまた此見方を採るに非れば、生産者の生産力係數を計算し得ないであらう。或人がマノイレスコの理論を Socialisme des nations と呼んだ所以もこゝにある。[8] またマノイレスコ自ら "Le protectionnisme apparait en quelque sorte comme le socialisme des nations."[9] と云つたのも理由無きではない。

けれども生産者の勞働を總て平等に見ると云ふマノイレスコの缺點は、生産力の概念を純粹化することによつていくらかは除き去られ得るのではあるまいか。例へば勞働に於ける熟練の差は、熟練を習得する教育費を純生産額計算に於ける控除項目に加ふることによつて、除き得るであらうし、勞働に於ける危險の差は、危險負擔の保險料を控除項目に加ふることによつて除き得るであらう。習得に困難なる勞働は多少獨占的傾向を伴ふが故に、それが費用以上に純生産額を增加せしむるは普通なのであるが、兎に角習得の教育費は控除せられねばならぬ。また勞働の危險負擔料も控除せらるべきであらう。マノイレスコは一九一四年のルーマニアに於ける勞働者一人の生産力について、

爆發物及び硝酸工業	一、九七〇弗
ソーダ及び炭酸工業	九四〇

8) Oulès, op. cit., p. 378.
9) Manoilesco, La théorie du protectionnisme, p. 319.

植物性油類工業	九二三
皮革工業	四四〇
綿布、織物工業	三一四
毛織物工業	二七八

等の例をあげてゐるが、此らの生産力が勞働の危險の影響を受けてゐることは否定出來ない。

また勞働の生産力の相異は勞働者の生活費の相異によつて著しい影響を受けてゐるが、マノイレスコは此生活費なる費用を控除してゐない。オリン[10]はマノイレスコを評して、「マノイレスコは生活費について何ら云ふ所がないが、勞働者の賃銀が低い農業勞働者の生産する價額が低いのは概して其生活費が低いことによるのである」と云つてゐる。[11] オリンによると、「交通至便にして教養ある人々が住むデンマルクの如き小國に於て、農業勞働者の賃銀は食物及び住居を貨幣にて換算して平均一二〇〇クローナである。これは日給約四クローナに相當する。之に反し工業勞働者は日給十一乃至十二クローナを受けてゐる。瑞典では農業勞働者の賃銀は四クローナであり、ストックホルムの工業勞働者の賃銀は平均十三クローナである。然るに同じ工業勞働者の賃銀は小都會に於ては八乃至九クローナである。かゝる賃銀の差の主たる原因は生活費の差である。瑞典の工業の關する限り、同一勞働の地方的賃銀の差は地代及び食物の價格の差を補償する。農業勞働者の低賃銀はその生活費が低廉なるに由る。農業勞働者は食物を低廉に得ることが出來、支拂ふ地代も低廉である。地代と食物との

10) 高橋次郎教授の談話によれば、Ohlinをオーリンとではなく、オリンと發音するのが、彼の母國での發音に近いと云ふことである。

11) 拙著、國際貿易政策思想史研究。

みを計算しても、農業勞働者の賃銀一二〇〇クローナは工業都市に於ける二倍の賃銀に相當する。」此オリンの叙述は恐らく農業勞働者と工業勞働者との生活平準を同一なりとしての計算であらうが、生活平準の相異が此ら勞働者の間に存在するとすれば、生活費なる費用の計算は少しく變化を要する。即ち生活平準の向上はそれ自體望ましきことなのであるから、此差に因る生活費の相異は費用として計算さるべきではない。同一の生活資料の價格が農村と都會とによつて異るであらう部分のみを費用として計算すべきであらう。

此最後のパラグラフに示された批判は、オリンの尻馬に乘つて私が舊著の中で述べた所のものである。今は私は寧ろ此批判が當つてゐないのを感ずる。もし closed system の一國を假定し、其國が生産力の指標を貨幣にて示された金額に置いて、農業企業と工業企業の生産力の比較をなすのであるとすれば、此批判は正しい。然しマノイレスコの主張は國際貿易を行ふ所の國に關してゐる。だから物價の高いために、輸出さるゝ商品の價格從つて價額が大となることは――かゝる價格をもつ商品が賣れるか否かを別問題として――一國にとつて結局有利であると云ふことになる。けだし此大なる價額を以てヨリ多くの外國の財貨を得ることが出來るからである。かゝる場合は、先に述べた生産技術に於ける危險の如く取扱はれねばならぬやうに見えるが、さうではない。危險の場合には、此危險は一國の厚生に損害を與へるものなのであつて、此を補塡した後でなければ、純生産額は出て來ない。從つて純生産額計算の控除項目の一となるのである。

Oulès は Le problème du commerce international. 1934. の約二百頁を費してマノイレスコの研究をなして

ゐるが、其中で企業の生産力の相異は國内に既に存在してゐるのであり、證明されてゐるのであり、國際經濟のうちに證明されてゐるのではないと云つてゐる。"Il faut faire bien attention, que les grandes différences de productivité entre industries, c'est-à-dire la production nette annuelle qui revient à chaque unité de producteur de chaque industrie, différences sur lesquelles sont établies la théorie nouvelle de l'échange international et du protectionnisme, n'ont pas été constaté dans l'économie internationale mais bien dans l'économie nationale."[12] 此批判の意味を私は明瞭に理解し得ないが、生産力の國際的比較をなさずして、國内的比較をなしてゐると云ふ意味であらう。だが舊著に於て私が指摘して置いたやうに、マノイレスコはKとK′とを大差ないものと假定してゐる。而して比較生産費説に類似せるが如き議論の立て方からすれば、KとK′とを同一視する假定は許されないが、マノイレスコの理論の成立にはK即ち國内の生産力が明らかになつてゐるだけで充足であらう。

尚またPlesiaが指摘してゐるやうに、生産力の低い産業から其高い産業に、また他方國では生産力の高い産業の放棄が如何にして行はれるか。そこにこそ保護主義があるわけであるが、事實の問題として其の解決は決して容易ではない。「此らの變化は如何にして實現され得るか。一國は如何にして其農業生産を放擲し得るか。今まで輸出してゐた商品の販路をもはや見出し得ない場合に、工業國は如何にして輸出商品の種類を變へることが出來るか。云ふまでもなく、此らの變化は理論上可能であるが、經濟的平衡――人類の經濟的平衡と云は

12) Oulès, op. cit., p. 332.

ずとも、少くとも當事國の經濟的平衡を攪亂することがあり得る。例へば、ルーマニアは、マノイレスコの理論が教へる地位にあらうとしたら、如何にしてその農業を放擲すべきであるか。ルーマニアの輸出の三分の一を消化する獨逸なり、其他のルーマニア商品の輸入國が、農業に大なる生産力を認め、農産物の輸入を停止して自ら之らを生産するとしたら、ルトマニアは如何になるであらうか。」[13] たしかにこのやうな問題もあらうし、産業の變化によつて生ずる國内の所得の分配關係に關する大なる問題もある。これらについてはマノイレスコは他日新なる著作によつて明らかにすべきことを約してゐる。

詳しく吟味して見ると、表面極めて論理的なるマノイレスコの生産力概念にも、重大な缺點さへもないわけではない。そしてその重大なる缺點は、或ひは Effertz が或ひは Landry が或ひは Pigou が或ひは Loria が解決しようとして果し得なかつた問題に關してゐる。けれ共ある程度まで嚴密性の要求を棄て去るならば、マノイレスコの生産力概念は貿易政策に於ける保護の經濟的方向の指標として役立つことが出來、從來學說史上に現はれた保護貿易理論のうちで、科學的價値の最も高きものたるを失はない。私は舊著以來になした多少の思索を傾けて、マノイレスコの生産力概念の再吟味を試みたわけである。たゞ本稿の重點はこれに置かれてゐるのではなく、この概念の想源の研究に置かれてゐる。

三

13) Plesia, L'autarchie, p. 43.

彼の生産力概念を盛つた La théorie du protectionnisme et de l'échange international の中で、自らの著書は極めて大膽 (extrêmement audacieux) であるのみならず、自らの理論は一國内の生産の構造に關する獨創的概念を基礎としてゐる (Notre théorie repose sur une conception personnelle de la structure de la production nationale.) と誇つてゐる。[1] そしてそれに續く叙述の中では、過去及び現在の諸大家の貿易政策理論は一般的保護理論でなく、從つてこれらと一般的なる保護貿易の事實の矛盾を指摘し、自說のみ現實の事實の說明に役立つと自負してゐる。果してマノイレスコの理論が彼の獨創であるのか否か、それを尋ねて見るのも、彼の理論が斬新なだけ、それだけ興味がある。

かやうなことをなすのは、彼の功績を減じ評價せしめようとする意志を藏してゐることを意味しない。近頃他界せる佛蘭西の貿易學者 Sauvaire-Jourdan が云つたやうに、「經濟學に於ては、他の總ての學問に於てより尙一層、一つのイデエを發見すると云ふことは、それを最初に表明することではなく、他の人よりもヨリよく其イデエの重要さとそれの歸結とを認識するだけのことなのである。」[2] たゞマノイレスコの生産力の概念は、彼に於て可成り精確なものとなつたとは雖も、彼以前に於て、而も彼が讀んだであらう所のものゝうちに既に存在した事實を明らかにしようとするに止まる。こゝではマノイレスコに時間的に接近せるものゝみの探索をする。

一九二〇年に、英國の技師 John S. Hecht は、La vraie richesse des nations. Esquisse d'une nouvelle civi-

1) Manoilesco, La théorie du protectionnisme, p. 8.
2) Sauvaive-Jourdan, La théorie du commerce international de Bastable, Introduction, p. VI en note.

lisation et de ses bases économiques.（佛譯、一九二五年）※を出版した。此著作はマノイレスコによつて屢引用されてゐる。殊に第廿五頁の引用の如きは、彼が此著作に充分な注意を拂つてゐたことを意味する。私が長い引用によつて示す所のものは、マノイレスコの概念と Hecht の概念との間に著しい一致があると云ふことである。

「例へば印度人が二百五十萬フランの機關車を英國に注文したとする。また此金額は米及び棉の輸入と云ふ方法で支拂はれるとする。賣買が行はれる前に、二國の各に原料と雇はれ得べき勞働者が無ければならぬのは勿論である。賣買が履行された後には、英國は一定量の米と棉花とをもち、印度は一定量の機關車をもつ。

「機關車を製作せる英國の勞働者は他の有利な仕事に雇はれ得べく、また原料も同樣であり、仕上げられた機關車も國内にて使用出來る。同樣に印度人は生産せる米と棉とを失ふ。此ら米と棉とは一定數の勞働者と道具及び機械を表はしてゐる。印度人は此らの勞働と道具で他の物を生産し得るであらうし、又は此らの米と棉とを自らの用に供することも出來る。そこで問題は次の形をとつて現はれる、二國何れが、又は雙方が、夫々等しいと思はれる使用價値を得たる後に於て、以前より富めるに至つたか。疑ひ無く英國は富めるに至つた。何となれば熟練な (habiles) 少數の勞働者の勞働を不熟練な (inhabiles) な多數の勞働者の勞働と交換したからである。

「英國の勞働者は必要品（必要は米と棉とから成ると假定する）を消費し、彼らの勞働時間は印度人のそれより遙

※ 原名 The Real Wealth of Nations or A New Civilisation and its Economic Foundations.

かに尠いのであるから、二百五十萬フラン分の米と棉とは、英國勞働者が消費する必要品の量即ち此ら必要品の使用價値より遙かに大である。此超過額は機關車の使用價値から、此製作中消費された必要品の使用價値を控除した額に等し。換言すれば、機關車の製造者は必要品に加へて著しく大いなる超過額を受ける。何となれば米と棉との生産に從事せる多數の印度人は其勞働中生活せねばならぬからである。其結果、此ら印度人が自ら生産せる米と棉とで生活し得るとしたら、またそれを生産して國が貧しくならないとしたら、消費する必要品の量從つて生産物は英國の少數の機械車の勞働者の消費量を遙かに超えるであらう。

「故に此取引で、英國は利益を得、此の利益は受けた必要品の使用價値と消費せる必要品のそれとの差に等しく、また此利益は一に全く英國生産の性質（qualité とあり、種類と譯すべきであらう）からのみ來るのである。……英國人がヨリ富裕になつたとしたら、それは、彼らが熟練なる少數の勞働者の勞働を、不熟練な多數の勞働者の勞働と交換したからである。[3]」

此引用から直ちに知り得るやうに、Hecht に於ても、産業の生産力（利益）ははひとり勞働に結び付けられてゐる。そして其生産力は産業の種類（qualité）と勞働の熟練勞働であるか又は不熟練勞働であるかとに依つて定つて來るとせられてゐる。Hecht が云ふ所の travailleurs habiles とか travailleurs inhabiles とかは、同類の勞働者が熟練又は不熟練と云ふ意味ではない。云はゞ高級勞働と低級勞働と云ふが如き意味である。此らの點はマノイレスコに見られる見解と根本に於て異る所がない。高級勞働の習得に要する教育費を考へてゐない點

3) Hecht, La vraie richesse des nations, pp. 227—9.

の如きも二人の學者に共通である。

それのみではない、此生産力概念（Hecht にあつては、生産力と云ふ文字は用ひられてゐない）が貿易政策の問題に結びつけられて來ることがマノイレスコと同樣であるのは、先の引用によつてほゞ知られるが、次の引用によつて一層明らかにならう。

「千人の不熟練勞働者があり、アメリカに輸出さるゝ商品を生産し、其生産費は賃銀から成り、此賃銀はまさに勞働者の生存賃銀であると假定する。雇主やフランスの輸出商やアメリカの輸入商が此商品の取引で莫大な利潤を收めることはあり得る。輸出商品の代價は、アメリカ熟練勞働者五百人がフランスの先の不熟練勞働者と同じ日數勞働して作り出せる生産物の輸入と云ふ方法を以てなされるであらう。此場合には、雇主、輸出商、輸入商の利潤の率を同一として、アメリカ勞働者の賃銀はフランスのそれの二倍となる。アメリカ勞働者は、雇主や輸出入業者を犧牲としてゞはなく、不熟練なフランス勞働者を犧牲として、此貿易から利益を受ける。

「まことに、もしアメリカからの輸入商品がフランスで生産せられるとしたら、――收穫が劣つてゐると云ふ條件の下にあつても――そして例へば七百五十人の勞働者によつて生産せられるとしても、此ら七百五十人は先の千人分の生活賃銀全體を分ち得ることが出來る。換言すれば彼らは生活賃銀のほかにその三分の一だけを餘分に得ることが出來る。勿論こゝでは、機會があれば、ヨリ高い交換價値を作り得るやうに勞働者を教育し得る普通の産業に關してゐる。七百五十人の勞働者が賃銀をヨリ多く得られるのみならず、二百五十人が他の

産業に雇はれ得ると云ふ結果が生ずる。

「かくの如くにして、フランスの勞働者は、當事者が誰一人として知ることなしに、搾取（exploités）されてゐる。これは何故なのであるか。人が輸出に對する注文の重要さを信じてゐるからであり、自由競爭の下でかゝる注文を受けようとすれば、輸出價格は低廉でなければならぬから、フランスの輸出業者は勞働者に、國民的犠牲（le coût national）が大である條件のうちに、即ち必要品をなるべく犠牲にし又は勞働時間を犠牲にする（長くする）が如き條件のうちに、商品を生産することを要求するからである。」[4]

だから、「不熟練なそして與へらるゝところ少き勞働を雇傭する人は、此らの勞働者と國民の犠牲に於て、輸出に於て利益を受けるのであり、人は此種類の生産物の輸出を禁止せねばならない。」[5]「不熟練産業に勞働を向けようとしてはならぬ。何となれば、熟練勞働の維持のみが社會に利益があるからである。」[6]「國は熟練勞働の生産場全市場を自國のために保持して置く權利がある。」「熟練勞働の總ての生産物の輸入を禁止することは正當であり、且つ望ましい。」[7]それどころか「自國で有利に生産し得るやうな商品の輸入と雖も、〔それらが不熟練勞働の生産物であるならば〕輸入を禁止すべきである。」[8]

Hecht に於て生産力に相當すべき概念は、純生産額の生産力であるのは明瞭であるが、此純生産額は或場合には使用價値（valeur en usage）とせられ、或場合には valeur en échange とせられ、マノイレスコに於けるほど明確ではない。然しとに角 Hecht は此生産力の計算の問題までに素朴ながら分析を進めてゐる。「一定の産

4) Hecht. op. cit., pp. 146—7.
5) Hecht, op. cit., p. 244.
6) Ibid., p. 292.
7) Ibid., p. 292.
8) Ibid., p. 294.

業に於て與られた使用價値を作り出すに必要な勞働と云ふ費用に、破壞された原料の使用價値を加へねばならぬのは、明白である。從つて、一產業が一國に齎らす價値は、自然が提供してくれたそして破壞されそしてまた補塡されねばならぬ原料だけ減少されねばならぬ。例へば鐵の棒の製造には、消費した石炭なり鑛物の噸當りについて、僅かな勞働しか必要ではない。之に反して機關車の製造には勞働の多くが必要であり、此ら勞働の使用價値及び交換價値は、破壞された原料の噸當りについて、甚だ大である。此結果として、不熟練勞働のほかに熟練や知識やの多量を必要とする機關車の製造や機械の製造は、一國の產業中の上位にあるべきものである。

「農業や其他の或產業に於ては、自然と人とが總ての損害を補塡する。生產費は從事する勞働者の必要品に限られる。測定し得る使用價値即ち經濟價値をもつ財貨を生產する產業に於ては、一勞働者に依つて得られる一國から見た價値 (valeur nationale) 即ち富の純增加額は、生產された全使用價値から、當該產業に從事せる勞働者の必要品の使用價値と消費された補塡の不可能な原料の使用價値との合計額を控除し、それを從事勞働者の數を以て除した商である。

「……補塡の不可能なる原料を捨象する。一產業の勞働者に對しては、此產業の價値は、生活賃銀 (salaires d'entretien) を販賣總價額から控除せるのに等し。

「此殘額は明らかに勞働者の總 richesse-salaires に等しい。而して此產業が使用價値をもつた財貨を生產し、

價格は此價値に相應するものとすれば、勞働者の利益は、社會の他の者の犧牲に於て得られたのではない。

「國民の富 (richesse nationale) の純增加額を見出すには、richesse-salaires の總額から、消費されて補塡の不可能な原料の使用價値——これは貨幣を以て表はされる——を控除せねばならぬ。此殘額を從業勞働者の數を以て除せば、勞働者一人によつて生產された富の純增加額即ち一國に此產業が齎らした純價値額が得られる。[9]」

Hecht に於ては、使用價値、交換價値、價格、價額等の概念が不明瞭であつて、其らの間の關係も明らかではない。從つて勞働者の作り出す純價値と云つても、正確にそれが何を意味するやが理解に困難ではある。けれども、もし使用價値を初めとし、種々の表現を與へられた價値なるものを、價格及び價額と解釋すれば、Hecht の一勞働者の作る純價値はまさしくマノイレスコの生產力とならざるを得ないものである。Hecht の著作はマノイレスコのそれに先立つこと九年に出版せられ、同じく先立つこと四年に佛譯せられてゐる。それのみではない。生產力概念の叙述に當つて重要なるところに於て、即ち生產力概念を明瞭にする第一頁 (La théorie du protectionnisme, p. 24.) に於て、Hecht の著作に言及してゐるのであり、他のところに於ても數回 Hecht に說き及んでゐるのである。私は Oulès と共に、Hecht がマレノイレスコの生產力概念の重要なる想源の一つを成したることを斷定するに躊躇しない。

9) Hecht, op. cit., pp. 158—9.